

# 情報 ひがし労

JR東労働組合 中央本部

発行人 松下 明

編集者 情宣部

## 終戦77年目の夏

8月17日付の上毛新聞「わたしの見た戦争」にて、

個人加入組合員の下田清子さんの記事が掲載されました。

### 生きるため土壁なめた

土壁の味は、しょっぱかった。生きるため、黄色い壁に舌をはわせた。食料を、栄養を求めていた。壁は鳥のふんまみれ。小さな体を思い切り伸ばして、できるだけ汚れた所を避けて。ざらざらした感触を今も思い出せる。

#### 短くなる行列

1945年7月末、46年1月、母に背負われ、日本への引き揚げ船を目指す行列の中にいた。

4人姉妹の三女。両親が鉄道関係の仕事で移り住んだ朝鮮で生まれた。一家は45年春に旧満州(中国東北部)へ移ったが、父は7月に徴兵のため帰国した。同月から連軍が街を襲撃し始め、母子は焼け出された。一行は徒歩で幾つも山を越えた。行き倒れた者も少なくない。行列は日に日に

旧満州で残留孤児に  
**下田 清子さん(81)**  
(高崎市北双葉町)



日本で再会した家族との写真を持つ下田さん

短くなった。空腹だった。ある時、一緒にいた男の子の口の周りが黄色いことに気付いた。土を食べたといふ。そういう方法があるんだ。そう

短くなった。空腹だった。ある時、一緒にいた男の子の口の周りが黄色いことに気付いた。土を食べたといふ。そういう方法があるんだ。そう

### わたしの見た戦争

ウクライナに重ねて

▷ 3

ぼにあつた無人の小屋の壁を、意を決してなめた。姉は「白いご飯が食べた」と言ってお断りした。母は「赤いご飯を置き去りにして姿を消した。」

46年1月、家族が一体みできる場所に着くと、子どもいなく、中国夫婦が下田さんを預かりたいと申し出た。着る物も食料も無い

扱いは厳しかった。新たに生まれた夫妻の子4人の世話を全て任せられ、「ご飯の時間に自分が食べる余裕がなく、後で隠れて残飯やブタ用の餌を食べた。小

と温かい時間を過ごすことが何より幸せ」と言いつつ、ロシアによるウクライナ侵攻のニュースを見ると、どうしても当時を思い出す。破壊されていく街を見ると、怒りで涙がこみ上げられる。昔と違うのは、遠方の国の情報がすぐに手に入り、支援を届ける方法もあることだ。「個人は弱い。何もできない。平和のためには、皆で行動すべきだ」

学校では「日本の鬼」とののしられた。当初、母は船が沈んで亡くなったと伝えられた。いつも泣いていた。80年、39歳になった下田さんは日本に一時帰国。母と妹に再会し、5年後に永住帰郷した。「家族や友人

#### 取材後記



林花野記者(22)

下田さんの体験の壮絶さは想像を超え、何度も聞き間違いはないかと思うほどだった。最もつらかったという4歳の自分を描いた絵には、黒くすすけた服をまとい、うつむき、沈んだ表情の少女

#### 知ること避けない

がいた。目の前で穏やかに笑っている下田さんとは信じ難かった。学校で戦争について教わった私は当時の人が味わった恐怖を想像し、ぞっとしてから深く知ることを避けてしまった。過去の戦争で犠牲になったのは日本人だけではない。今のウクライナやロシアの人も同様だ。戦争を風化させないためには、若い世代が戦争の悲惨さに向き合う必要があると痛切に感じた。

憲法改正反対！反戦平和！二度と同じ過ちを繰り返さない！